

二次元ドリーム文庫 / PDF立ち読み版



ハレム レジスタンス

Flarem Resistance

小説 竹内けん
挿絵 かん奈

第一章

まどわりつく闇

006

第二章

運命の扉

048

第三章

修羅の如く

090

第四章

死を告げる天使

133

第五章

塔の上の君

167

第六章

遠くに夢見し理想郷

213

登場人物紹介

Characters



レイテ

かつて「紅蜘蛛」と呼ばれ、暴れ回っていた女怪盗。現在は王国に反抗する解放軍のリーダーをしている。

エルフィン

ヴァレリアの腹心を務める少年貴族。戦では周りから一目置かれるほどの知謀を誇る。



ヴァレリア

セルベリア王国の貴族であり、戦では無敗を誇る若き女将軍。エルフィンにとっては頭の上がない姉のような存在。



ナターシャ

セルベリア王に献上されそうになっていた美しい娘。大人しそうな雰囲気だが、意外と大胆なところもある。

身を起こそうとする貴族の若さまを両手で制して、反乱軍の女頭領はベッドの脇に腰を降ろした。

「あの、何か？」

「ん、ちよつとね。きみの決断を少し後押ししてあげようかと思つてね」

「後押し？」

悪戯つぽく言われたエルフィンが戸惑うと、レイテは顔を近づけてきた。

「そう、なんだと思う？」

「さあ？」

エッチな雰囲気のお姉さまの顔が近くにあるというだけで、エルフィンは意味もなく赤面してしまう。

その初心うぶな少年の耳元で、レイテは甘く囁いた。

「イ・ロ・ジ・カ・ケ♪」

「えっ！」

絶句するエルフィンが反応するより早く、レイテの右手が、少年の股間を捕らえた。「はぐっ!？」

童貞少年の悲しさで、美人のお姉さんに股間を鷲掴みにされたらもはや動けない。

「い、色仕掛け……って。じよ、冗談はやめてください」

「冗談じゃないわよ。古今、男をその気にさせるのは女の仕事よ。特に生命の危機に陥つ

た男はどうしようもなく女が欲しくなるものだわ」

レイテは容赦なく少年の下着を奪い、下半身を露出させると、いまだ縮こまっている逸物を手に取った。

ムクムクムクと逸物はみるみるうちに大きくなっていく。

「あたしも、本当はこういうことしたくないのよ。性を武器にするなんて女としては最低だからね。でも、男は女の愛撫によって奮い立つものなの。女はそれがわかっている時、あえて卑怯な手を使うのよ」

「そ、その割には、なんか物凄い嬉しそうな表情に見えますけど……」

怯える童貞少年の指摘に、童貞食いをしようというお姉さまは莞爾と笑う。

「そりゃそうよ。美少年の童貞を食べるのは女のロマンよ」

「ロ、ロマンなんですか……?」

「そ、それに貴族の若さまの童貞を啜えるのは、若さまつきの侍女の役得で、あたしら庶民にはめったに手に入らないレアものよ」

そう宣言すると同時に、レイテは亀頭部にしゃぶりついた。

「はう……!!!」

エルフィンはずわらず自らの頭を抱いてのけぞった。

「チュパチュパ、ジュルジュル……ムチュチュ……」

今日、知り合ったばかりの命の恩人の女性が、自分の逸物にしゃぶりついている。それ

も頬とか凹ませながらすごい吸いつきである。

「ひい、はあ……ダメ……やめてええええ……」

エルフィンは、幼少の頃からヴァレリアに性的な虐待を受けてきた。

いまにして思うとあれは愛情表現の一環だったのだとわかる。

ヴァレリアに射精に導かれるのは屈辱的だったが、イヤではなかった。イヤだと思いつつも、心の中では受け入れていた部分があり、嬉しかったのだ。

しかし、この女性については愛情など抱いていない。本当に食われている、という気分だ。

(しかも、超ウマい……。なんか滅茶苦茶エロい)

そのフェラチオテクニクは、明らかにヴァレリアよりも上手かった。

左手で肉棒の根元を押さえながら、右手で顔にかかる髪を押さえ、上目遣いにエルフィンの様子をうかがい、ジュルジュルと激しく頭を上下させて啜るのだ。

(ああ、ダメだ。このままじゃイっちゃう！)

自分でも驚くほどあつという間に追い詰められてしまった。

「ヴァレリアさまごめんさい!!!」

幼少の頃から一人の女性に飼育されてきた少年は、条件反射的にヴァレリアの名前を叫んでしまっていた。

しかし、あと少しで射精という瞬間に、レイテは顔を上げてしまう。

「な、なんで……!？」

ことここに至っての中断に、エルフィンが身を乗り出してしまった。

「うふふ、そう簡単に出させてやったんじゃ、色仕掛けにはならないからね♪」

無様に逸物をひくつかせる少年を、エッチな雰囲気のお姉さまは細い顎を上げて高慢に見下す。

「それに童貞だとばかり思っていたけど、坊やはどうやら、あの大天使の稚児をやっていたようだね」

「……」

沈黙するエルフィンの顔を見て、レイテは何やら得心した顔をする。

「うふふ、きみがわたしたちに加担したくないのは、彼女への義理立てもあるのかな？
まあ、いいわ」

身を起こしたレイテは、黒い胸当ての留め金に手を当てた。そして、外す。

ポロリッ。

よく熟れた先肥りの乳房が二つ、まろびでた。

ゴクリッ。

初めて見る女性の生乳の前に、エルフィンは思わず生唾を飲んで魅入ってしまった。

（お、おっぱいっ！ おっぱいだ）

ヴァレリアはさりげなく隙を見せて、エルフィンを誘惑して楽しんでいたところがあつ

たが、本当に見せてくれたことはない。

真っ白い乳肉はまるでマシユマロのように柔らかかそうでありながら、どっしりと重そうであった。その頂きを飾る色はワインレッドで、乳輪も乳頭も大きい。まるで大粒のルビーのように妖しい存在感があった。

初めて見たから他と比べようがないが、この大きくて柔らかかそうな肉塊は、ひたすらに淫らな塊に見える。

少年の食い入るような視線を存分に楽しんだレイテは、自らの乳房を手ブラで持ち上げた。

「うふふ、大天使さまにこんなのはやられたことはあるかい」
少年の下半身に屈み込んだお姉さまは、自ら作り出した谷間に、いきり立っている少年の逸物を挟んでみせた。

(あ、暖かい……)

表面はしつとりとした肌触りで滑らかなのに、ぷりぷりの弾力がある。

その感覚は、この世のものとは思えぬほどに素晴らしかったが、それ以上に女性の象徴の中に、自らの男根が埋もれているという視覚的な衝撃が凄まじかった。

「うふふ、気に入ってくれたようね」

瞳を輝かせたレイテは、両手でモミモミと豊乳を男根に押しつけてきた。
柔らかい乳肉の間で、いきり立つ男根はウネウネと弄ばれる。

「うふふ、もうお汁こんなに垂らしちゃって……若いわねえ♪」
レイテが指摘したように、熟れた乳肉に包まれた若い男根はピクンピクンと痙攣して、とつくんととつくんと熱い液体を垂れ流していた。

おかげでエロ乳の内側は、濡れてテカテカと光りだす。

「だって、だって、だって……こんな、こんな、こんな……」

自らの男根を、エロ乳に包まれた少年は、脳裏が焼き切れんばかりに興奮してしまい、まともな会話ができない。

「それだけ喜んでもらえると、あたしとしてもやりがいを感じるわね♪」

莞爾として笑ったレイテは、サービスとばかりに上体を上下させ、乳首の突起で亀頭の横を擦った。

「ひいあぁ〜」

エルフィンは何んとも情けない悲鳴を上げる。

巨大な肉塊を上下させるのだ。女にとつてもなかなかの重労働なのだろう。乳房の表面には珠のような汗が浮かび、谷間に流れて、エルフィンの塗りつけた先走りの汁と混じる。

「うふふ、美少年が悶える姿ってこんなに萌えるものだったんだねえ〜♪」

頬を火照らせたレイテは満足げな表情を浮かべて、さらなるダメ押しをしてきた。

すなわち、肉棒の先端の穴を、まるで母猫が子猫の排便でも促すようにペロペロペロと舐めたからたまらない。

「ああ！ あああ！ ああああああああああ!!!」

エルフィンにはレイテの頭を掴んで悶絶する。

よく役者が違い、一方的な戦いの様相を、手のひらの中で転がすというが、性的に未熟な少年は、百戦錬磨の淫乱エロエロお姉さまの乳房の中で転がされて、果てた。

ドビュドビュッドビュドビュユユユユユ!!!

逸物は激しく痙攣して、その頂きからは飛沫を上げながら白濁液が噴き出す。

それは当然、パイズリ中のエロかつこいいお姉さまの鼻先から額、そして赤いバンダナへと浴びせられる。

「あらあら、もう漏らしちゃったか。坊やには少し刺激が強すぎたみたいね。あたしも久しぶりだから加減を間違ったみたいだ」

レイテはしほみゆく逸物から、乳房を離して身を起こした。

そして、胸にかかった牡の雫を指で掬って美味しそうに舐めしゃぶる。

「はあ……はあ……はあ……」

抑えられてもエルフィンには反論する余裕はなかった。ただ自分を弄んだ痴女を見上げて激しく喘ぐだけである。

「ほら、なに一回出しただけで満ち足りた顔しているんだか。十代半ばの男の子ってのは無限の性欲があるもんだろ。次はあたしにやっておくれ」

蓮っ葉に命じたレイテはヒラリとベッドに立ち上がった。そして、エルフィンの顔に跨



女たちはそれぞれのけぞった。

大人しい顔をしたナターシャだが、常にノーパンであるから、こういう時は便利である。指にすぐ淡い毛質が絡みつく。一方のレイテの陰毛は一本一本が太かった。それでいて繁茂面積は少ない。普段から過激なパンツ姿なのだ。お手入れをしているのだろう。

ふわふわの陰毛と、しゃりしゃりした陰毛の毛質の違いを楽しみつつ、陰唇に指を入れる。

くちゅりクチュリ……。

指に温かい粘液が絡みつく。

レイテの愛液は、とろとろと粘着質なのに対して、ナターシャの愛液は、さらさらしている。

指がふやけるまで女壺を弄んだエルフィンは、そろそろよかろうと判断して、身を起し、ズボンを下ろした。

そこで愕然と立ち尽くす。

「えっ」

女を抱く時、いつも痛いほどにいきり立つ逸物が、今日に限ってピクリとも反応していなかったのだ。

「……こ、これは……」

動揺するエルフィンとは別に、主君の逸物が小さいままだと知ったナターシャも、シヨ

ツクで愕然としている。

「え、あ……エルフィンさま、わたくしに飽きられた……」

「そ、そういうわけじゃないんだけど……ど、どうしたんだろ。ぼく……」

予想外の事態に顔面蒼白になっておろおろしているエルフィンを前に、バンダナに巻かれた頭髪を掻いたレイテが、呆れたと言いたげに苦笑を浮かべた。

「ふっ、いくら豪快に装っても、おちんちはごまかせないってことだね」

「えっ」

綻るような表情をする少年に、お姉さまは苦笑する。

「あのね。女の身体をまさぐりながら、まったく別のことを考えていたら、そうなるわよ」
指摘されてわかった。自分はいままでレイテと、ナターシャの身体をまさぐりながらも、脳裏は明日の戦のことでいっぱいだったのだ。

「……す、すいません」

「ふっ、謝るようなことじゃない。男を元気づけるのが女の仕事さ」

身を起こしたレイテは、逆にエルフィンを軍机に寝かせた。

「まったく、戦の準備の一環として、セックスしようなんて小難しいことを考えるから、こういうことになるのさ。セックスなんて本能のままに楽しめばいいのにさ。ほら、リラックスしな」

素っ裸にされたエルフィンの胸元を撫でながら、レイテは傍らで呆然としているナター

シヤを見る。

「ほら、あんたもいつまでだらつと股開いて寝ているんだい。マグロな女なんてすぐに飽きられて捨てられるよ」

「え、あ、はい……」

同じ愛人という立場で、レイテを意識しまくっているナターシヤは、戸惑いながらもその指示に従う。

エルフィン の 右側 から レイテ、左側からはナターシヤが寄り添った。

「じゃ、始めようか？ しつかりご奉仕するんだよ」

同僚に片目をつぶってみせたレイテは、エルフィン の 唇 に 自らの官能的な唇を重ねた。

「あっ」

ナターシヤも負けじと、エルフィン の 唇 に 自らのかわいらしい唇を重ねてくる。

「ん、んん、うん……ふうん……」

二人の柔らかい唇が、交互にエルフィン の 唇 に 押しつけられ、擦りあわされる。そのうちに女たちは舌を出し、男の唇を舐め回す。

さらに男の右半身にレイテの強靱な舌、左半身にナターシヤの小さな舌が這い回っていた。

ピチャリ、ピチャリ、ピチャリ……

まるで猫がミルクでも舐めるかのように、女たちの濡れた舌が、唇から頬、顎から額、

額から耳、首筋を、鎖骨を、腕を上げさせられて脇の下などを舐められる。

左右の脚には女たちの脚が絡められ、濡れた陰毛を擦りつけられた。

（ああ……すごい気持ちいい……）

女たちの愛がひしひしと伝わってくるようだ。ストレスに押しつぶされようとしていた少年の心が少しづつ軽くなっていく。

左右の乳首まで舐められて、エルフィンが恍惚としていると、やがてレイテが顔を上げた。それにナターシャも従う。

「どうだい、そろそろできるだろ」

レイテに促されて、エルフインは自らの股間を見下ろした。

そこでは逸物が天を突かんとばかりにいきり立っている。

「ああ、エルフィンさまのお大事が復活されました」

いままでお酒でも飲んでいたのか、と心配したくなるほどに顔を赤くしているナターシャの青い瞳が、嬉しさにキラキラと輝く。

「ああ……、その……ありがとう」

はにかみながらお礼を言うエルフィンに、姐御肌のお姉さんは莞爾と笑う。

「お礼には及ばないよ。あなたの年でインポになるなんてまずないんだから。……そんなことより、あたしやそろそろその立派なおちんちんで突きまくってもらいたいんだけどね」

「わたくしだって突いてもらいたいですう」

慌てて詰め寄ってくるナターシャの下半身もかなり切なそうだ。受け身一辺倒だった少女が初めて攻めに回ったことで、いつも以上の昂揚感に誘われているのだろう。

「わかりました。今度こそ、お二人の喘ぎ声を、戦神への供物として捧げましょう」

軍机から身を起し飛び降りたエルフィンは、代わって二人の情婦を軍机に寝かせた。

そして、右側のレイテの左足を右肩に、左側のナターシャの右足を左肩にかける。

レイテは右側面を机につけ、ナターシャは左側面を机につけ、それぞれ向かいあうことになった。

この状態で、愛液滴る二つの蜜壺に特攻する。

「あんっ♪」

これが男女一組による普通のセックスならば松葉崩しといわれる体勢だ。しかし、二人いることで女たちは鏡合わせのように相手の姿を見ることになる。

「うおおお ああああ ああっ!!!」

野獣のような雄叫びを上げたエルフィンは、二つの蜜壺を行き来した。

まだ男を知って間もない乙女の硬くて狭くてザラザラした蜜壺と、子供も産んだ経験のある女の柔らかくウネウネとした蜜壺。

それだけでもまったく違う感触で気持ちいいのに、さらに二人とも横位で向かいあっているために、蜜壺が左右にぶれる。

(右側面がザラザラしたり、左側面がザラザラしたり、これはすごい、くせになりそう…)

…

我を忘れたエルフィンが夢中になって二穴を行き来する。

「は、恥ずかしいですう……」

乱交初体験のナターシャはたまらず悲鳴を上げる。

「あたしだって、恥ずかしいわよ。一回りも違う女と比べられるのよ」

悪戯っぽく笑ったレイテはナターシャをぐいっと抱き締めた。

女たちの前面が重なりあう。熟れた乳房と青い乳房が押しつぶしあった。

その艶姿に魅せられたエルフィンは、ますます腰使いが激しくなる。

「はう、感じますう。レイテさんの体内に入っている時にまでわたくしの身体に衝撃があるん」

向かいの女の体内に入っている時も、男の腰は両方の股間に当たっているわけで、ドスンドスンとした振動とともに、向かいの女性の感触まで疑似的に体験してしまっているよ
うだ。

女たちはまるで鏡合わせのように喘いでいる。

「はん、いいいい……ああううう……」

「すごい、イク、もうイクううううう!!!」

女たちは向かいの女の喘ぎ声に釣られて、自らも大きな喘ぎ声を出している。

その喘ぎ声に釣られてエルフィンの腰使いはどんどん速くなっていった。

蜜壺もキュンキュンと蛸壺のように締めてくるが、もはやどちらに入れていいのかなどよくわからない。

「も、もう、イキますっ!」

「いいわ! きて」

「あう……」

レイテの威勢のいい答えと、ナターシャの気の抜けた返事に導かれ、エルフィンが精を放った。

「くっ」

ドビュドビュドビュドビュドビュドビュドビュドビュツ!!!

「はああああああんん!! ビュービューどくんどくんってえええ!!!」

「いああああああんん!!! あたしにもびくんびくんってきているよおおお!!!」

どうやら女たちも交互に入れまくられることによって、自分の体内に入れられているのか、向かいの女の体内に入れられているのかよくわからなくなってしまうらしい。陣屋に女たちの絶頂の声が響き渡る。

エルフィンが改めて見下ろすと、ナターシャの膣内で果てたようだ。しかし、まだまだできる。

暴走する牡は、まったく小さくならない逸物の勢いそのままに、蜜壺巡りを再開する。グチュグチュグチュ……。



ぐちゅぐちゅぐちゅ。

膣内に精液が詰まったことで、ピストン運動はさらにスムーズになった。

「ひい、ひいあ、ダメ！　こんなのダメっ！」

男女の結合部からは煮汁が、一突きするごとに溢れ、一抜きごとに掻き出される。

その状態でずっこずっこ豪快に突き回したエルフィンは、再び射精。

ドビュンドビュンドビュン!!!

「ひいひい……っ!!!」

二度目とは思えぬ濃厚な熱い液体を膣内にさらに注ぎ込まれたヴァレリアは我を忘れて悶絶してしまった。

あの大天使とまで称えられるお姉さまを、我を忘れるほどに悶絶させるのが面白く、エルフィンは、次の体位に移行しようとする。

この時、ヴァレリアを拘束する手綱が煩わしくなった。そこで腰刀を抜いて、大天使の手首を拘束する綱を切る。

そして、そのままヴァレリアをうつ伏せにして、今度は後背位になった。

「あん、ああ、あん……」

大天使と称された気高き女が、尺取り虫のようにお尻を高くかざしながら犯されている。（あは、ヴァレリアさまの肛門まで丸見えだ。ヒクヒクしている）

この姿勢だと、お尻の穴がよく見える。ヴァレリアほどに美しい女性でも、しっかり肛

門があるというのがなんか不思議だ。

「あん、はあん……はあん……」

すっかり男に犯されるままになってしまったヴァレリアに声をかける。

「どうですか、ヴァレリアさま気持ちいいですか？」

「うん、気持ちいい……お腹の中で、お腹の中でエルのおちんちんが暴れるの」

シーツに顔を埋めたヴァレリアは、涙ながらに啜り悶えた。

（うわ、あのヴァレリアさまが素直になった。こういう状態を墮ちたと言うのかな。よし、このまま完全に墮とすぞ）

気合いを入れ直したエルフィンには、ヴァレリアの乗馬によって鍛えられたデカ尻を掴むと、ガンガンと腰を振るつた。

「あ、ダメ、そんな……お願い、少し休ませてえええ……」

「ダメです。鉄は熱いうちに打って言うでしょ。まだまだこれからです」

涙ながらに訴えるお姉さまに対して、エルフィンは情け容赦なく腰を叩き込む。

「ああ、らめええ……!!!」

ヴァレリアはさながら活きのよい牝馬が嘶いなないて暴れているかのよう。油断しているとはじき飛ばされそうだ。

その引き締まった腰をしっかりと押さえつけて、ずっこずっこ肉棒を出し入れする。エルフィンの腰とヴァレリアのデカ尻が景気よくぶつかりあって、パンッパンッパンッ

パンツという拍手音が室内に響き渡る。

同時に、グッチュグチュグチュと女の体内では、愛液と精液が存分に混ぜられる。

「ああ、壊れる！ わたし、壊れちゃうっ！」

「壊れていいですよ。ヴァレリアさまは、ぼくのものなんですから、何があってもぼくが守ってあげます。だから、もうどこにも行ってはダメです」

エルフィンは、ヴァレリアの肉体と精神、いずれをも手に入れようと、がむしやらに腰を使う。

そうこうしているうちに三度昂りが襲ってきた。

「ヴァレリアさま、そろそろまたイきますよ」

「ひい！ ダメ！ これ以上はダメ！ もうわたしの中、エルのものでいっぱいなのよ！ これ以上、出されたらパンクしちゃうっ!!!」

「なら、パンクしてください。ぼくのものでお腹をいっぱいにしてください！」

そう叫びながら、逸物が射精運動を始めた。

「いあああああああああああ!!!」

あのヴァレリアがなんとも女らしい悲鳴を上げた。

その体内に向かって、三度容赦なく大量の欲望を吐き出す。

ドビュ！ ドビュッ！ ドビュユユユユユユッ!!!

三度目とは思えない大量の濃い液が、女の体内に新たに満たされた。



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- 雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ!
- 二次元ドリームマガジン・コミックアンリアル**のバックナンバー**も買えるよ!
- ジャンル別**で作品も選べて超便利!
- 二次元編集部**の愉快的Blog**も更新中!
- 期間限定で、文庫お買い上げの方に**オリジナルブックカバー**をプレゼント!



<http://www.comic- Valkyrie.com/>

KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18歳ではないからこそ表現できるドキドキがある!!



<http://www.cran-berry.com/>

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!



<http://www.mille-feuille.jp/>

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!



<http://www.2d-dream.jp/>

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!

